

# 古代における死と文学

——家持の屈折——

針原孝之

(一)

万葉集における「死」のことは、またそれに関連して考えられることばについては、すでに中川幸広氏の「万葉集巻十一・十二ノート」と題する論文があつて、その中で「万葉集における死」「万葉集における恋」「万葉集における命」「万葉集における生」と分類した詳しい調査がある。万葉集における「死」を考えると、当然意識された「生」「恋」「命」なる語の関連について見なければならぬ。二三七〇、二四〇一、二五九二番歌における恋の衝動の激しさをみると、それは「恋」と「死」であることがわかる。中川幸広氏はこれらは相聞の歌における「死」が観念的であつたとしても、死にのぞんだ生命の燃焼、ことばをかえていえば、死によって限られた生の意識との熾烈なもえあがりか抒情詩を単純な一本の情緒のもとにまとめる役割を果たすのであると言われる。中川氏の調査結果からみれば「死」という語は挽歌において表出する数より、相聞歌中にあらわれるのを特色としていることが理解される。そして死と生、恋、命を一首の中にどのように詠んでいるかを見ていくと次の通りである。

- ① 「生」と「死」十三首
- ② 「恋」と「死」四十七首
- ③ 「恋」と「生」十首
- ④ 「恋」「死」「生」の語をもつ歌、三首、

また、中西進氏の調査によれば、「死」をめぐる愛の歌をみると死を歌う万葉歌八十七首の内、愛の歌は七十三首である。八十七首の巻別のあり方は、

卷一—1	卷九—2	卷十四—2
卷二—1	卷十一—4	卷十五—6
卷三—2	卷十一—24	卷十六—6
卷四—14	卷十二—16	卷十七—3
卷五—2	卷十三—2	卷十八—2

の如くであつて作者未詳歌に圧倒的に多い。このような愛の歌が「死」を独占するというのは何であるのか。

青木生子氏は伝承詩の抒情的再生という面を考察されたが、歌から愛と死の心情を探究されたのは中西進氏であつた。

恋ひといへば薄きことなり然れども我は忘れじ恋は死ぬとも

(12二九三九)

「恋ひ」というのは「薄きこと」なのである。それでいてその薄さもかわらず「我は忘れじ」という、躊躇もない自己主張がある。その結果、死のおそれを恋と等価に認識しようとするに到る。

今は吾は死なむよわが背恋すれば一夜一日も安げくもなし

(12二九三六)

恋の苦悩の極限を「死なむよ」というのは先の作者と等しい。しかしそれを現実の苦悩と対比させる時に死はあるやすらぎをこの作者に示そうとしている。

と述べられ、さらに

愛と死の等価性を考えてみると、古代人たちが愛に執する事によって死を見つめる—それがおそれにしろ、安らぎにしろ—に到つたのだという事がよくわかる。そして愛を見つめる事によって自己を意識し、その時に彼らはきわめて孤独であり、その孤独に沈淪した時に自我を主体性の中に確立した。愛によって古代人が初めて死を考えたという。

のである。私は死と命、命と恋、命と生などについて歌の中で切迫した感情をどのように表現したかについて考えた。

その後、憶良、旅人についての諸問題と家持へ継承していく過程を述べた。また、家持歌における仏教的傾斜、無常感をどのような系譜で考えられるかについても述べた。

(一)

大伴家持は次のような死・事変に遭遇している。

①父旅人の死。家持十五歳の時、天平三年（七三一年）七月二十五日、六十七歳没。

②憶良の死。天平五年（七三三年）六月中に死すか。七十有四。憶良辞世の歌がある。

士やも空しかるべき万代に語り継ぐべき名は立てずして（6九七八）

③尼理願の死。天平七年（七三五年）に尼理願が病死したので、坂上郎女が葬送のことを執り行なった歌（四六〇、四六一）がある。大伴家と仏教との関係も推測できる。

④妾の死。家持二十三歳の時、天平十一年（七三九年）。

十一年己卯夏六月、大伴宿禰家持、亡りし妾を悲傷びて作る歌一首

今よりは秋風寒く吹きなむをいかにか独り長き夜を宿む（3四六二）

この歌以下一連の作によって家持には妾がおり、その妾には若子があったことが分る。六月妾が死に家持は長短歌十三首を詠んで悲しみ深い気持を表わしている。山本健吉氏は「おそらく家持に男女間の『もののおはれ』を教えた女性で、家持より年長で、姉さん女房ではなかったかと想像する」と述べられている。さらに、弟書持も家持の気持を推測して自分の悲しみを次のように詠んでいる。

長き夜を独りや寝むと君が言へば過ぎにし人の思ほゆらくに

(3四六三)

家持の下句をそのまま上句に詠んですぐれた歌とは言えないが、その寂しさ、悲しさの気持は十分詠んでいると言えよう。

⑤弟書持の死。天平十八年（七四六年）。

都から家持の所へ弟書持の訃報が届けられた。早く父をなくした書持、家持の兄弟は非常に親密でお互に頼みとしていたのであろう。家持は「長逝せる弟を哀傷しふる」歌を詠んでいる。

天離る 鄙治めにと 大君の 任のまにまに 出でて来し われを送る

と 青丹吉 奈良山過ぎて 泉川 清き川原に 馬とどめ 別れし時に

真幸くて 吾帰り来む 平けく 斎ひて待てと 語らひて 来し日の

極み 玉梓の 道をた遠み 山川の 隔りてあれば 恋しけく 日長き

ものを 見まく欲り 思ふ間 玉梓の 使の来れば 嬉しみと 吾が待

ち問ふに 逆言の 狂言とかも 愛しきよし 吾弟の命 何しかも 時

しはあらむを はだ薄 穂に出る秋の 萩の花 にはへる屋戸を 朝庭

に出で立ち平し 夕庭に 踏み平げず 佐保のうちの 里を行き過ぎ

あしひきの 山の木末に 白雲に 立ち棚引くと 吾に告げつる

(17三九五七)

真幸くと言ひてしものを白雲に立ち棚引くと聞けば悲しも

(17三九五八)

かからむとかねて知りせば越の海の荒磯の波も見せましものを

(17三九五九)

七年前の「亡妾」への挽歌とくらべても、この作はあまりにも抒情が淡々として深い哀傷が表現されていない。先人の諸作のあとを追いつきたためかもしれない。これが越中守時代の長歌三十四首の最初に位置する作品である。

⑥橋諸兄の死。天平勝宝九年（七五七年）。

天平勝宝九年一月六日、左大臣諸兄は失意のなかで没した。家持は内舎人時代から諸兄に近づいて信頼され、以後ながくあつい庇護を受けていた。家持は諸兄を「大主」とまで呼び諸兄に誠実に仕えた。左大臣の歌を記録するのに異常なまでに熱意を示した。その死にさいして、またその後にお

いても一首の挽歌さえ記録に残していない。

家持は作れなかったのか、それとも作ったが記録をさしひかえたのであろうか。よくわからない。かりに作らなかったとすれば情に厚い家持は作るにはあまりにもその悲嘆が深かったと思われる。

⑦奈良麻呂の変。

青年時代以来の親友、橘家の奈良麻呂、同族の有力者古麻呂の横死。古慈妻をはじめ駿河麻呂の失脚、そして親交あつかった池主の投獄は、彼の意に反する行動に走って受難したにせよ、歌にたくされた述懐はあまりにもよそよそしく大夫的ではない。「族に諭す歌」の家持的精神が事件後たどりついた心境なのであろうか。身辺の事態に直面してとうてい歌には表白できない感懐が深く家持をとらえていたのではないだろうか。やり場のない痛憤を自らなだめるためにこの一首はうまれたのだと北山茂夫氏は言われる。

移りゆく時見る毎に心いたく昔の人し思ほゆるかも (20四四八三)

聖武の他界、諸兄の失脚と死、太子の廃立、仲麻呂の専横、追われる立場の伴氏—こういった所が「移りゆく時」の中身なのではないか。「昔の人」は誰を指すか不明であるが、その葬送にさいして挽歌を記さなかった家持がいまこの一首の中に哀悼の気持をこめたのであろう。

咲く花は移ろふ時ありあしひきの山菅の根し長くはありけり

(20四四八四)

時の花いやめづらしもかくしこそ見し明め秋立つごと

(20四四八五)

これらの歌をもって家持の文学に死期が訪れたと考えるのは誤りである

うか。このような考えが許されるならばこの時期が家持の屈折であった。この後次の十四首の作品が歌われている。

宝字元年十二月 宴歌二首

宝字二年正月 宴歌三首

// 二月 宴歌七首

// 七月 宴歌一首

宝字三年正月 宴歌一首

宝字元年の奈良麻呂の変、その他政治上の暗い事件以来家持の歌は宴歌ばかりになり、家持の創作意欲は低下してしまった。

家持の歌人的生涯の終りは政治優先の世界に生きた家持であってみれば、その政治上のいくたの事件にあった後はやはり作歌する気持になれなかったのではないかと思われる。

万葉集は巻頭歌—雄略天皇の歌ではじまり最後に家持の歌で終わっている。家持は官人生活に生命をかける人であって歌人としての成功よりも家持自身、または大伴家を中心とした家を大切にす人であった。越中赴任時は家持は年令的にもまだ望みもてる頃であったが、因幡守になる時は今までの政治的事件などから悲劇の舞台を感じとっていたのではないか。それ故に歌わなくなってしまったのではないかと思う。

それは万葉集の終りを遂げるにはあまりにもあっけない幕切れであり、家持の作歌生活において悲しいものであったろう。万葉集の終りは家持の屈折に起因し、家持の屈折は万葉集の終りでもあったと思われる。